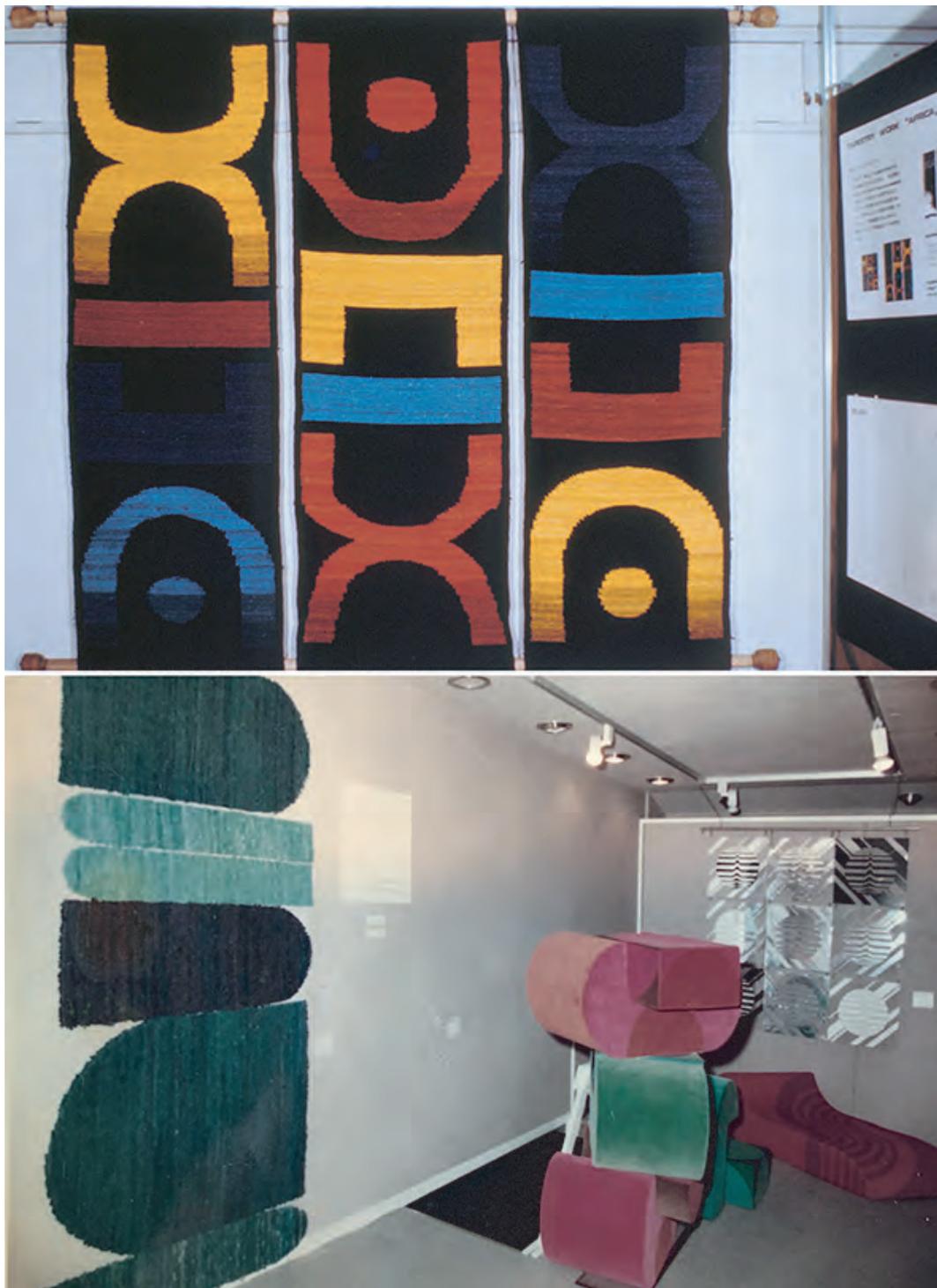


『私を創ってくれた3つの作品』

スペースデザイン部会員 佐伯 和子



この写真は上段が武蔵野美術大学の卒業制作、下段が卒業時に開いた3人展の様子です。左の作品です。古いアルバムはお気に入り写真20枚位を残してすべて処分してしまったので残っている記録はこれだけです。

大学で教わったのは平織とつづれ織の2種類のみ、それに手紡ぎ糸でつけたグラデーションが唯一の工夫点です。稚拙な作品だと思いますが織ることが楽しくてタピストリー制作を仕事としていきたいという思いが強かった記憶があります。

30歳の時最初の個展を開きました。

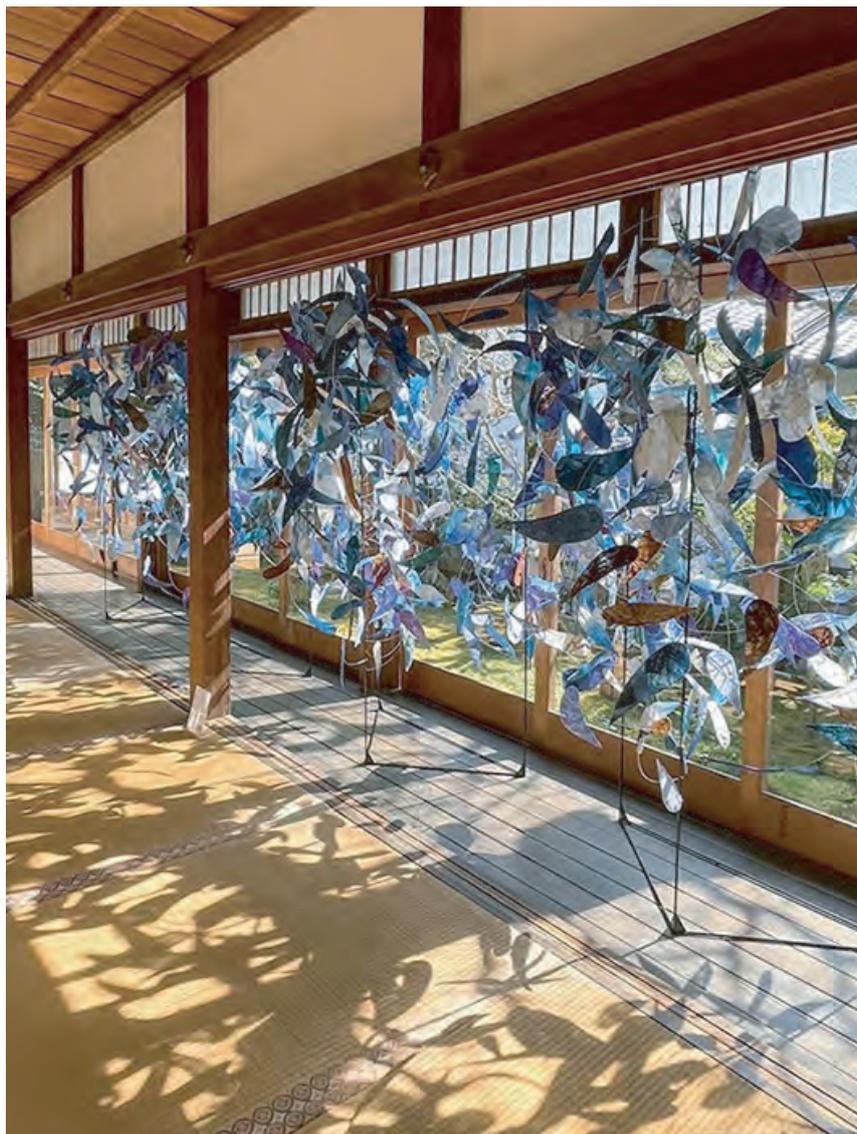
それを某ゼネコンの社長が見てくれて、東洋紡の本社にタピストリーを造りませんか？と大抜擢のチャンスを下さいました。この仕事で必要にせまられて、デザインプレゼンテーションの方法、裏打ちの実施方法、特注金物を作ること、今では当たり前におこなっている諸作業を手さぐりで習得してきました。ターニングポイントとなった最初の作品です。



銀座の AC ギャラリーという小さなギャラリーで何度か個展をしていました。ギャラリーに勤務していた女性が後に吉祥寺美術館の学芸員になり私の個展を企画してくれました。糸の葉と呼ぶニードルワークです。糸の葉の数はおよそ1万5千枚。1ヶ月半ほぼ毎日会場で自分の作品を眺めていました。



この仕事は今も続けていて、今年京都の泉涌寺、高台寺の伝統空間で展示した立体作品へとつながりました。



15年前から琵琶湖湖畔の宗教団体の建物にコイリング技法の抽象的作品を造ってきました。そこに琳派をテーマにした美術館を建てるという計画が起こり、私にも収蔵作品を造るようにと要請がありました。

今まで抽象作品しか造っていないし（大学の授業で鳥獣戯画の模写をしたのが唯一の具象訓練）、琳派とはどのようなものか熱海 MOA 美術館に紅梅白梅図を観に行くところから始めました。お話があってから5年間試作を重ね四苦八苦の末2つの作品を収めることができました。そのうちの1点「梅林図」です。



振り返ってみると私のターニングポイントは個展だったなと思います。そしてその背景には、新制作展があります。新しいことをやろうと思う時、まず新制作展の大きな空間で眺めることで気づくことが多くありました。社会に提案する前段階のまたとない練習場でした。織物から始まったのですが、今では全く織っていない作品の方が多くなっています。これもSD部で多様な素材、技法を見ることが出来たおかげだと思います。

佐伯 和子 プロフィール

色と質感にこだわったファイバーアートを、ホテルや病院などの公共空間に制作している。

1951年 愛媛県生まれ
1973年 武蔵野美術大学工芸工業デザイン科卒業
1982年 ストライプハウス美術館
2016年 武蔵野市立吉祥寺美術館
現在まで個展 14回開催

〈受賞歴〉

新制作展新作家賞
日本クラフト展優秀賞
清州ビエンナーレ（韓国）ベストアーティスト賞

〈作品収蔵〉

岡田茂吉研究所美術館